

ひとは、なぜ化粧をするのだろう？

スアンズナンタ・ラチャパット大学 講師

ひらまつ りゅうえん
平松 隆円

男も女も化粧をする。そういうと、疑問におもわれるかもしれません。

どうして、男が化粧なんだと。ですが、本当に男性は化粧をしないのでしょうか。

朝起きて顔を洗う、寝ぐせの髪を整える、歯を磨く。男性だって、毎日しますよね。これらも化粧の一つ。男性だって化粧をするんです。

① 化粧とはなんだろう？

化粧をするとき、わたしたちは化粧品を使います。化粧品とはなにかと聞かれたら、ファンデーションやマスカラ、口紅などと答えるでしょう。正解です。ですが、それらはあくまでも化粧品の一部でしかありません。

日本では、薬事法という法律で、化粧品とはなにかと定義されています。それによると、ひとの身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、または皮膚もしくは毛髪を健やかに保つことを目的に使用するものが化粧品とされています。

つまり法律上、化粧とは外見を変えたり、美しく飾ったりすることだけではなく、清潔にすることだとされているんです。なので、朝起きて顔を洗うこと、寝ぐせの髪を整えること、歯を磨くことだって立派な化粧なんです。

ちなみに化粧はその昔、「けわい」、「おつくり」、「みじまい」などともいわれていました。

「けわい」とは、気配のこと。化粧をするひとの外見にあらわれない本質を、それとなく表現する手段が化粧でした。

「おつくり」とは、カタチをつくるということ。なにをつくるかといえば、もちろん顔です。素颜では不完全。化粧をして、初めて顔になるんです。

「みじまい」とは、身仕舞い。つまり、身だしなみです。化粧をしないということは、身だしなみができていないことであり、素颜で人前にでることは失礼でした。

わたしたちは化粧というと、本当の自分を化粧によって欺いていると考えてしまいがちです。ですが、本来の意味としては、身だしなみであり、素颜のままでは外からは見ることのできない本当の自分を表現する方法が、化粧だったんです。

② どうして化粧をするの？

そんな化粧ですが、どうして、あなたは化粧をするのと聞かれたら、なんと答えるのでしょうか。

かわいくみられたい、素颜だと恥ずかしいから。さまざまな声が聞こえてきそうです。

かわいくみられたいから化粧をするというひとは、かわいい自分になりました



出典：http://vadimandreev.com/?page_id=295&nggpage=2,
vadimandreev 氏の Youtube サイト：www.promakeup.tv

図1 化粧は変身か、自己の改善か

いという願望があるはずで。いわば、かわいい自分が理想の姿。化粧によって、今ある自分を理想の自分に変身させます。

素顔だと恥ずかしいというひとは、いつもの自分に化粧で手を加えます。自分の顔で自信のある部分を強調したり、みられたくない部分を隠したり。化粧によって、日々の自分のみえかた・みられかたを管理します。いってみれば、よそおいです。

化粧をするのは、おしゃれのためではないんです。自分が自分としてあるために必要不可欠なもの。それが、化粧なんです (図1)。

③ 化粧がひとの行動に影響を与える

化粧をすることは、ただ外見を変えるだけではありません。それを考える

ヒントとして、少し衣服についてみておきましょう。

カリフォルニア州立大学デイヴィス校で教授を務めているスーザン・カイザー氏によれば、服を着ることには3つの働きがあるといます。それは、自己の確認・強化・変容機能、情報伝達機能、社会的相互作用の促進・抑制機能です。

自己の確認・強化・変容機能とは、自分自身がどのような人間かを、自分の服装にもとづいて確認し、そのイメージを強めたり、あるいは変容させたりという働きのことです。

また情報伝達機能とは、服装を通じて、他者に自分の特徴や欲求を伝える働きのことです。

そして社会的相互作用の促進・抑制機能とは、よそおいがひととひととの

コミュニケーションを促進したり、抑制したりしてしまう働きのことです。

この3つの働きは、化粧にもあてはめることができます。

化粧をする理由は、変身であり、よそおいです。化粧によって、理想の自分に近づけることで、自分はそういう人間なんだと確認し、自分を変えていきます。

よく、服装の乱れは心の乱れといわれたりします。外見は、そのひとの内面のあらわれでもあります。外見によって自分を変えていくこともできるんです。

つまり、化粧によってなりたい自分の顔をつくることは、たんに美しく自分の外見を変えろというだけではなく、自分自身の内面や行動も変えていきます。ギャル風な化粧をすればギャルに、清楚な化粧をすれば、そういうひとに自分を変えていけるんです。

また、情報伝達という意味では、化粧によって自分の性格や価値観をひとに伝えます。そして、わたしはこういう人間ですと、相手に理解してもらいます。

初対面のひとと会うとき、わたしたちは目の前にいるひとがどんなひとなのか知りません。ひとは見た目で判断してはいけなくてよくいわれます。ですが、どんなひとか知らないからこそ、目でみてわかる外見をきっかけに、付き合い方を決めていくしかないのです。

寝ぐせだらけの髪形のひとなら、だらしが無いひとなのかとか。これは、ことばを使わないコミュニケーション

の典型です。

そして、その情報を受けて、ひととひとはコミュニケーションをおこなっています。外見からだらしが無いひとと判断したら、そのひとのことを信用しないでしょう。結果として、これからつきあっていくのはやめようかなとおもいます。コミュニケーションが抑制されたんです。

また、わたしたちは、毎日同じ化粧をしているようにおもいます。ですが、じつはそうではありません。

家にいるとき、仕事に行くとき、友達と遊びに行くとき、デートに行くとき、結婚式に行くとき、お葬式に行くとき……。自分がどこに行くか、だれに会うかによって化粧を変えています。そこには、自分の役割と規範が存在しているからです。

④ 化粧で演じわける

化粧は、今の自分を理想の自分に近づける方法です。ですが、それは自分の役を演じることでもあります。

ひとはだれしも、なにかの役を演じています。同じひとでも、子からみれば母という役、親からみれば子という役を演じます。夫からみれば妻という役でも、不倫相手からすれば彼女という役。同じひとなのに、ずいぶん演じる役が違います。

だからこそ、わたしたちは演じる役によって外見を変えるんです。そうしないと、違和感が生じます。松本幸四郎さんがミュージカルと歌舞伎に同じ外見で出演したら、へんですよ。そ

れと同じなんです。

会社の同僚に、休日バツリと出て恥ずかしいのは、会社で演じている自分じゃない、休日の自分をみられたから。いわば、楽屋裏をのぞかれたのと一緒です。

また、規範という意味では、わたしたちが生きる社会では、外見に関する暗黙のルールが存在しています。お葬式に行くとき、派手な化粧をしていくと批判されます。つまり、お葬式では派手な化粧をしてはいけないというルールがあるからです。もちろんそれは、法律のように明文化されているわけではありません。日本という社会に生きるひとびとのあいだで、暗黙の了解として存在しているのです。

若いひとからすると、自分の好きな化粧をしたいとおもうかもしれません。ですが、ときとして他人からの期待にこたえて化粧をしなくてはいけないこともあります。

期待にこたえなければ、その社会のルールが守れないひと、というレッテルを貼られ、誰からも相手にされなくなるでしょう。いわば、規範にのっとった化粧をするということは、その社会のルールを知っている、その社会に生きるにふさわしい人間なんだという証明でもあるんです。

⑤ 化粧は文化的な行動

その意味で、化粧は文化的な行動といえます。

どんな化粧をするべきかは、そのひとが生きる、社会や時代の影響を受け

ます。化粧に関する規範は絶対的なものではなく、変わるんです。

たとえば、わたしたちは電車のなかで化粧をすべきではないと考えています。化粧は人前でするものじゃないのに、最近の若者といったら…と。

ですが、いまから80年ほど前は違っていました。年の瀬もせまった、1937年12月25日。読売新聞が「市電にお化粧用の鏡 満員の中でも御婦人たちコンパクト不要デス」という記事を掲載しています。これは、東京を走る市電に鏡を設置したという内容。つまり、市電のなかでどうぞ、お化粧してくださいということ。この頃は、女性が電車のなかで化粧をしても非難されなかったんです。それが今では、化粧は電車のなかではしてはいけないということになっています。

ひとは、その社会に生きるにふさわしい人間となれるように、生まれた瞬間から学び続けています。化粧も同じなんです。わたしたちは、周囲の大人やメディアを通じて学習し、化粧をすることを学んでいるんです。

つまり、化粧をみれば、その社会や時代がどのようにあるのかを見通すことだって、できるのです。

⑥ 時代をみとおす

数年前から、若い女性のあいだで、黒髪が流行しています。今から20年ほど前、黒髪は重たい印象で暗くみえるかと、茶髪が流行しました。じつは、この茶髪と黒髪の流行には、意味があります。

茶髪が流行する前の1980年代後半から90年代前半にかけての経済を振り返ると、実質経済成長率が年率4.4%という、バブルの時代でした。それが90年代後半に入ると、バブルは崩壊し、長きにわたって日本経済は低迷することとなります。

若いひとは、バブルと聞いてもピンとこないかもしれません。ひとりの女性に、送り迎えだけをしてくれる彼氏、プレゼントだけをくれる彼氏、食事だけに連れて行ってくれる彼氏、そして本命の彼氏がいたという話があります。

バブル時代は、女性が男性を選ぶ、とても強いポジションにいました。そんな時代にはやったのが、黒髪と太眉。じつはこれ、平安時代の女性と同じなんです。当時は母権社会で、女性が財産をすべて掌握していました。そんな平安時代、女性たちは黒髪でした。

長くてまっすぐな黒髪は、女性の顔



図2 髪を盛って子どもっぽくみせる

を大人っぽくみせます。それに対して、茶髪でゴムやヘアピン、ヘアスプレーなどを用いて、結ったり巻き上げたりする髪形は、子どもっぽい顔にみせるんです(図2)。

景気が悪いと、茶髪で子どもっぽい顔。その理由は明確で、景気が悪いと、男性たちはバブルのときのように女性たちにお金を使うことはできません。今度は、男性が選ぶ立場になるわけです。もともと男性は女性よりも相手を守りたいという欲求や、相手を思いどおりにしたいという欲求が強いといわれています。つまり、女性は男性に対してかわいらしく守ってあげたいような女性を演じることで、不景気で先行き不透明な社会を生き抜こうとしたのです。

ちなみに、平安時代では艶やかな黒髪だけではダメで、まっすぐで長くなくてはいけないとされていました。長くてまっすぐで艶やかな黒髪は、美人のあかしだったんです。というのも、当時は今のように洗髪剤もヘアドライヤーもありません。艶やかで長い髪を維持できる女性、そして髪が長くても日常生活に支障がない女性というのは、身分の高い女性だけでした。つまり、身分の高さと美が密接に結びついていたんです(図3)。

じつはこれ、現代のタイと同じ。日本人に人気の旅行先である東南アジアの国、タイ。この国では歯列矯正がおしゃれとして存在しています。日本人だと、歯列矯正を恥ずかしく感じ透明の器具を使うことが多いのですが、タ



出典：源氏物語絵巻 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

図3 長くてもっすぐな黒髪は美人

イ人は赤や青などのカラフルなものを使用します。というのも、歯列矯正ができるというのは経済的に豊かな証拠。それが、美と結びついているからなんです（図4）。



図4 美は社会や時代によって異なる

⑦ 化粧は気持ちがいい

ところで最近、ジャストシステムが20～40代の男女600名を対象に、男性の美容に関する調査をおこないました（“男性の美活”に関するアンケート）。

それによると、男性がスキンケアなどをおこなう理由は、自分が気持ちがいいからというのが、第1位でした。たしかに、洗顔後に化粧水をつけたりすると気持ちいいですね。

化粧がひとの行動に影響を与えますが、同時にひとの心理にも影響を与えます。化粧をして気持ちがいいというのも、その一つです。

研究によれば（スキンケアによる感情調整作用に関する研究）、同じスキンケアでも朝でははげみ、夕ではやすらぎの気持ちを与えることがわかっています。これは、朝夕ともスキンケアから心地よさに関する感情がひきだされて

はいるものの、朝は活動の開始に弾みをもたらすような、夕は活動の終わりに癒しをもたらすような感情がひきだされているんです。いわば、化粧にはそれをするひとの感情を変える力があるんです。

化粧療法やメイクセラピーということばを、きいたことがあるでしょう。これらは、化粧のもつ、感情を変える力を利用したものです。もちろん、化粧をすることで感情が変わるのは、医学的疾患があるひとだけではありません。男性でも、女性でも、若いひとでも、年を重ねたひとでも、可能です。そしてときには、妊娠をしている女性のストレスを和らげることだってできるんです。

③ 化粧は生きるために必要なもの

化粧は、たんなる一過性のファッションではありません。また、無駄で不要なものでもありません。

化粧は、化粧をするひとの外見を変えます。ですが、化粧による外見の変化は、それをみるひとだけではなく、外見を変えたひとじしんのココロにも作用します。

化粧をおこなう意味は小さくありません。にもかかわらず、わたしたちは化粧があまりに日常的に身近にありすぎて、それを考えることがありませんでした。まして、化粧ってなんだろうと研究するひともしません。

それは、ひとは見た目じゃないということばを、否定したくないからなんです。化粧は顔を中心におこなわれ

ます。つまり、化粧が美醜の問題と関係するために、研究が避けられてきたんです。純粹に化粧を研究対象としながらも、それが与える社会への影響は、なにを美とし、なにを醜とするのか、そして美となるにはどのようにすればよいかといったことだけに焦点があたりてしまいます。研究内容、そして研究者じしんが批判されたくないというおもいから、研究されてきませんでした。

ですが化粧は、いうまでもなく、ひとがひととして、またひとと関わって生きていくためには必要不可欠なものなんです。自分が自分として生きていくために、化粧を活用して欲しいと願います。